

## Groupe des Quatre et ses ami(e)s 2022 [Program Note]

◆金子仁美：《炭酸～3Dモデルによる音楽 XIV～》オンド・マルトノとトロンボーンのための  
"Carbonic Acid – Composition by 3D Modelling XIV" for Ondes Martenot and Trombone

この作品は、2018年に開始された3Dモデルによる音楽の第14作目となる。

このシリーズが始まる前に、サントリー芸術財団の委嘱で、「オーケストラのための分子の饗宴」を作曲した。そこで、オンド・マルトノを取り入れ、大矢素子さんに演奏していただいた。このオーケストラ作品で芽生えたアイデアがその後の3Dモデルによる音楽シリーズに繋がっている。その流れの中で、今作でオンド・マルトノを取り入れる念願が叶い、その音色に着目するコンセプトで、長年信頼を寄せている村田厚生さんのトロンボーンとの共演(または饗宴)を試みることに実現した。主催者、演奏者の皆様に感謝いたします。

[金子]

◆新実徳英作曲《魂舞ひ》バリトンとピアノのために  
"Soul Dance" for Baritone and Piano

I, II, IIIの3部から成る歌曲集。

Iの明恵上人は12-13世紀、空海上人は8世紀、IIの『万葉集』は7世紀、東国出身の防人の歌、そして都人それら、IIIの南東の歌人恩納ナベは18世紀、琉球最古の『おもろそうし』など、長細い日本列島の東から南までの歌たちが時空を超えてこの歌集に結ぶ。

言うまでもなく「魂舞ひ」とは詠み手のそれぞれの心の中で「魂が舞っている」、そのことを表わすタイトルだ。

この歌曲集を作ることにした契機はなんといっても明恵上人の狂気にも近い2篇、空海上人の生死を喝破する1篇の歌との出会いであった。そこから『万葉集』、『おもろそうし』などへと視座が広がっていった。

全音四人組コンサートで歌曲を発表するのは今回が初めてのことである。演奏の労をお取り下さる松平敬さん(Bar.)と中川俊郎さん(Pf.)にこの場をお借りして心よりの感謝を表したい。

[新実]

◆西村 朗：《キールティムカ》ユーフォニアムとマリimbaのための  
"Kirtimukha" for Euphonium and Marimba

世界的なユーフォニアム奏者である外園祥一郎さんから、ユーフォニアムとマリimbaのための二重奏曲の作曲をすすめられ、その新作を全音の四人組コンサートで初演するというご提案をいただいた。マリimbaは外園さんとのユニットでもご活躍の名手の西久保友広さんがお引き受けくださるとのこと。

大変興味深いお話であり、ご提案を受けて作曲を試みることにした。

作曲にあたっては、ユーフォニアムとマリimbaの出会いによるグッと前向きの表現パワーの増大を思い、ちょっと風変わりなテーマだが、以前から温めていた強烈なある「顔」に対する賛歌にしようと考えた。

キールティムカの顔。

キールティムカは、顔と手だけの聖獣像。ヒンズー教の寺院などの門の上に鎮座している。その顔の睨みで外敵邪気を払う。

当然ながら、その物凄い顔にコロナ・マスクの着用は無い。

ユーフォニアムが奏するのは、牙の生えた大きな口が発する邪気払いの呪文。そして、貪り食べ飲む快感の喜びと興奮の叫び。キールティムカは、蛇をも齧り食べ、なんと、かつて自らの体も食べてしまったと伝えられる。

そして猛烈な鼻息と深い呼吸の揺動。

一方、マリimbaは大きく見開かれた両目とその眼光。頭の尖ったツノ。顔のゴツい骨格。堅牢な上下歯が打ち合わされてリズムックに時間をも噛み砕く響きと共に、味覚、臭覚、聴覚反応なども表現する。

以前から、「顔」のある音楽を書きたいと思うことはあった。

が、今回はさらに思い切って「顔」そのものが音楽であるような、そんな作曲を試みようとした。一種の諧謔性を伴った内容と言える。

[西村]

◆久石譲《揺れ動く不安と夢の球体》2台チェロのための  
"Shaking Anxiety and Dreamy Globe" for Two Violoncellos

原曲は2012年、Hakuju ギターフェスタ委嘱作品として作曲した。ギターの開放弦を使ったリズムックな楽曲に仕上がりに、2014年には僕が企画する現代の音楽シリーズ Music Future Vol. 1においてマリimba 2台のために Re-Compose した。

そして2022年知り合いの西村朗氏よりこの由緒ある会への作曲の機会をいただき2台のチェロの曲を書こうと張り切っていたのだが、パンデミックのために延期されてきた海外のコンサートが再開し、チェコ・フランスツアー、北アメリカツアー、ニューヨークのRadio City Music Hall(6000人×5日間)などを行なっていくうちにコロナに感染。かなりの作曲依頼を抱えていたが全てに遅延が生じて作曲が間に合わなくなった。この会への参加も断念せざるを得ないと考えたが、特にヨーロッパで人気の若手グループ"2 Cellos"の演奏を聞いて本楽曲を再び Re-Compose するアイデアが浮かんだ。しかし時間がなかったこと、新たなアイデアがいることなど考慮し、最も信頼する作曲家長生淳氏に編曲を依頼した。チェロの開放弦を利用することなど打合せした上で彼に全て任せた。そして仕上がった楽曲は別の楽曲に生まれ変わり、躍動感あふれるミニマルの反復と複雑な変拍子を用いた原曲の構成はさらに立体的に、そして人間的になったと僕は考えている。

曲名は、アメリカの詩人ラッセル・エドソン(1935-2014)が生命の宿る瞬間を表現した一節による。

[久石]

◆池辺晋一郎《バイヴァランス XVII》2本のトロンボーンのために  
"Bivalence XVII" for Two Trombones

元来、教会の楽器として荘厳な響きを専らとしてきたトロンボーンは、ベートーヴェンがその「交響曲第5番」最終楽章で朗々と吠えさせて以来、表現領域を大きく広げてきた。「大きなトランペット」を意味しつつ、前身であるサクソバットの「引く、押す」の意も包含しているのが現代のトロンボーン。

97年のチェロに始まり、以後ヴァイオリン、ヴィオラ、クラリネット、オーボエ、コントラバス、打楽器、サクソフォン、トランペット、マンドリン、声、ハーブ、フルート、ホルン、リコーダー、ファゴットとつづけてきた2つの同楽器のためのシリーズの一環である。トロンボーンという楽器の可能性を徹底的に追求してみようと考えた。現代音楽の騎手・村田厚生さんの存在が発想の原点だ。オーケストラの一角という立ち位置ではできない、卓越した奏者2人だからこそ可能なことを、すべてやってみようというコンセプトである。この春に書き始め、8月18日に脱稿。村田さん推薦の飯田智彦さんとの初めてのおつきあひも、楽しみである。

[池辺]